

他集団に属する主体への行動を促進させる 要素に関する研究

A Study on Factors that Promote Behavior Toward Members of Other Groups

京都橘大学 牧 和生

Kyoto Tachibana University Kazuo MAKI

Keywords *identity, Inner Voice, Experimental Economics*

1.はじめに

ホスピタリティの本質が他者理解であるなら、われわれは現実社会において、多くの他者理解の機会を失っているかもしれない。山路らが指摘するホスピタリティの重要な概念である「敵ではない他者を歓迎する」ことは、われわれの多様化する価値観や、アイデンティティによって、「敵ではない他者を歓迎できない」状況を生みだすことがある^①。本研究では、アイデンティティや自己が所属する集団に注目し、われわれが日常生活において、「敵ではない他者を歓迎する」ことを促進させる要因について、心理的側面から考察を行う。

2.アイデンティティと社会脳—他者を認識し、他者の意図を推測する—

われわれは、常に他者とともに社会生活を営んでいる。その際、誰と接しているのか、どの集団に属しているのかという要因は、われわれのアイデンティティとも密接に関係している。アカロフらは、アイデンティティは他者の行動も影響するとして、効用関数内に他者の行動による自己へのアイデンティティへの影響を採用した。アカロフらは、この他者の行動が自己のアイデンティティに与える影響はマイナスであると指摘した^②。また、アカロフらは自己のアイデンティティに影響する要素（変数）として、どの集団に属するか、集団内で求められる理想の状況と現実との乖離度、社会的規範なども検討している。このアカロフらの議論を参考にすると、われわれは自己のアイデンティティを傷つけない他者と集団に属することが望ましいといえる。

われわれが他者の存在を意識するとき、感情の創

出や意思決定を担う脳の働きにも注目すべきである。開らは他者の発言や行動の意図の推測、他者への共感を生み出す際に活性化する前頭葉（特に前頭葉眼窩野）は、われわれが社会生活を営む上で重要や役割を担っているという^③。

そこで、本研究では前頭葉の計測に特化した光トポグラフィー（fNIRS）を用いて、3種類の疑似的な状況を被験者に想像してもらい、その後の意思決定がどのように変化するのかを検討した。

3.タスクデザインと実験のねらい

実験のタスクデザインとねらいは次のとおりである。われわれは普段何かしらのコミュニティに属している。その所属するコミュニティ以外の場所で、同じコミュニティに所属する他者と出会ったとき、その他者が初対面であったとしても、敵ではない他者として行動できるであろう。一方で、所属するコミュニティ以外に属する他者と接する場合は、所属する集団の違いから他者を歓迎する行動をとることが出来ないかもしれない。そのような社会的文脈にわれわれが置かれたとき、どのようなことを意識すれば他の集団に属する他者を「敵ではない他者」として歓迎できるのであろうか。本実験のねらいは、その敵ではない他者としてわれわれが認識し、積極的な行動を促進させる要素を実験によって明らかにすることである。

実験は次のように行われた。被験者は青山学院大学の学生 6 名（男女 3 名ずつ、全員右利き、年齢は 20 - 21 歳）であった。実験にあたって、青山学院大学倫理審査委員会の定める個人情報保護、実験参

加は自由意思であることを確認し、承諾書にサインをしてもらい実験を開始した。

計測機器はSpectratech社製のOEG-SpO₂を使用し、Fastモードで計測を行った。OEG-SpO₂は前頭葉の16箇所(16CH)を計測することが可能である。実験タスクは次の流れである。

①統制群(タスクA)、実験群①(タスクB)、実験群②(タスクC)ともに実験開始直後に黒い背景に白い十字が10秒間表示される。

②次に、指示文が10秒間提示される。タスクAは大学主催ではない就職活動セミナーでたまたま隣に座った学生が、「同性の同じ大学の学生」であったというものである。そこで、この隣の他者がどのような人であるか想像してほしいと指示される。

タスクBは指示文の一部が変更され、隣の他者が「同性の違う大学の学生」となる。

タスクCについては、指示文自体はタスクBと共通であるが、指示文の後に1枚画面が追加される。その画面には、「異なる価値観を理解出来てこそ立派な人間だ」という言葉が表示され、画面は5秒間提示される。

③3種類のタスクともに、10秒間隣の他者を自由に想像してもらう。

④その後この想像した他者に声を掛けるか5秒間検討してもらい、声を掛ける場合はテンキーの1を押下してもらう。本実験では、主にこの箇所のデータをサンプリングする。

⑤3秒間の休憩ののち、②に戻り3回実験を繰り返す。

4. 分析方法と分析結果

データ分析は、6人分の計測データを加算平均した。採取データのうちオキシヘモグロビン変化のデータをサンプリング箇所から240データをランダムサンプリングし、*t*検定によって平均値の差が統計的に有意であったか検証する。

データのサンプリングに関しては、3回の試行のうち、被験者の実験への不慣れも考慮し、2回目と3回目の試行からデータを採取した。

実験結果は次のとおりである。図1、図2、図3は計測中のデータサンプリング区間における典型的なオキシヘモグロビン変化を示している。



図1. タスクA(統制群)における典型的なオキシヘモグロビン変化(出所)筆者作成⁽⁴⁾

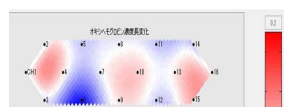


図2. タスクB(実験群①)における典型的なオキシヘモグロビン変化(出所)筆者作成⁽⁴⁾

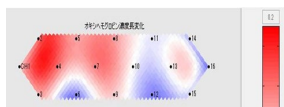


図3. タスクC(実験群②)における典型的なオキシヘモグロビン変化(出所)筆者作成⁽⁴⁾

タスクAとタスクBにおけるオキシヘモグロビン変化の平均値の差は、16箇所すべてにおいて統計的に優位であった($p < 0.05$)。タスクBとタスクCでは、CH.9、CH.11、CH.13を除く13箇所においてオキシヘモグロビン変化の平均値の差が統計的に有意であった($p < 0.05$)。タスクAとタスクCでは、CH.6を除く15箇所においてオキシヘモグロビン変化の平均値の差が統計的に有意であった($p < 0.05$)。声を掛ける意思決定のテンキーの押下数に関しては、タスクA、タスクC、タスクBの順となった。

5. おわりに

実験結果から、自己と同じ集団に属する他者を想像することは積極的に実行できるが、自己と異なる集団に属する他者には積極的に関与しない心理が確認された。しかし、自己と異なる集団に属する他者であっても、心理的に後押しする要素の存在は他者への主体的行動に効果的であった。ホスピタリティの基本である「敵ではない他者を歓迎する」ことは、アイデンティティや他者への先入観などから現実で実行するには困難が付きまとう。他者と自己は異なる存在であることを常に意識することが、ホスピタリティを実行する際に重要となるのである。

注

- (1) 山本哲士(2008)『新版ホスピタリティ原論 哲学と経済の新設計』文化科学高等研究院出版局、P.30。山路頭編(2013)『航空とホスピタリティ』NTT出版、P.5。
- (2) Akerlof, G. A. and Kranton, R. E. (2000), "Economics and Identity" *Quarterly Journal of Economics*, 115 (3), pp. 715-753.
- (3) 開一夫・長谷川寿一編(2009)『ソーシャルブレインズ 自己と他者を認知する脳』東京大学出版会、P.161。
- (4) fNIRS Data Viewer を使用し作成した。